

タッピングタッチはどんな人にも効果があるのか？ その2

— 被虐待経験を調整変数として —

○大浦真一・松尾和弥（甲南大学大学院人文科学研究科）・福井義一（甲南大学）

キーワード：タッピングタッチ，社会的効果，被虐待経験

目的

タッピングタッチ（以下 TT）は、指先の腹を使って軽く弾ませるように左右交互に優しくタッチすることを基本としたケアの技法（中川, 2004）であり、ペアで交代して実施するのが基本である。TT は対人関係の改善効果を謳っており、ケアする側（ケア群）またはケアされる側（被ケア群）だけでも、ペアで相互に実施した場合と同等の効果を持つことが分かっている（福井, 2016; 福井・大浦・松尾, 2017）。

TT は万人に効果があると言われている（中川, 2004）が、そのことを実証的に検討した研究はなかった。そこで、大浦・松尾・福井（2018）はアレキシサイミア（以下 Alex）傾向の高低群で、TT が対人関係に及ぼす効果の違いを検討した。その結果、Alex 傾向の程度に関わらず、ほとんどの対人関係の変数において TT 実施後には肯定的変化が見られたのに対して、Alex 傾向が高い場合にのみ一部の対人関係の改善効果が阻害されることが分かった。TT が万人に対して同等の効果を有している訳ではない可能性があることから、TT が効果を示さない他の条件を探索することで、TT の効果メカニズムの解明やより効果的な臨床実践に寄与できる基礎的なデータを提出できると思われる。

そこで本研究では、福井他（2017）のデータを用いて被虐待経験が多い群と少ない群で、TT が対人関係に及ぼす効果の違いを検討した。

方法

分析対象者：福井他（2017）で用いた 149 名のうち、本研究で用いる変数が揃った 46 名（男性 11 名、女性 35 名）のデータを分析対象とした。M_{age}=18.89 歳（SD=0.61）であった。

尺度構成：被虐待経験を Child Abuse and Trauma Scale (Sanders & Giolas, 1991; Sanders & Becker-Lauren, 1995) の日本語版（田辺, 1996, 2005）を用いて測定し、被虐待経験の合計得点を得た。対人関係上の効果を測定するために、被受容感・被拒絶感尺度（杉山・坂本, 2006）により被受容感、被拒絶感得点を、対人依存欲求尺度（竹澤・小玉, 2004）により情緒的依存、道具的依存得点を、孤独感尺度（落合, 1983）により共感性孤独、個別性孤独得点を、信頼感尺度（天貝, 1995）により不信、自分への信頼、他人への信頼得点を、他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度短縮版（笹川他, 2004）により社会的不安得点を、自己開示尺度（丹波・丸野, 2010）により自己開示得点を、パートナーへの信頼感を測定する尺度（福井, 2016）によりパートナーへの信頼感得点をそれぞれ得た。

倫理的配慮：本研究のデータ収集時には、実施先の大学のヒトを対象とした研究倫理審査委員会の承認を受けた。また実験の際には、協力者に対して調査の目的と参加の任意性およびデータは厳重に保管され、研究以外の目的で使用することはないこと、匿名での参加であるため個人が特定されることはないといったプライバシーの保護について文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。さらに、協力者が実験実施時に体調不良を訴えた場合に対処できる体制も整えておいたが、実際にそのような者はいなかった。

結果

被虐待経験得点を平均値折半して、高群と低群を設定した。対人関係の効果の各下位尺度得点について、介入（pre・post）と群（ケア・被ケア）、被虐待経験（高群・低群）の 3 要因多変量分散分析を行った。その結果、共感性・個別性孤独と自己開示を除く全ての下位尺度得点において介入（pre・post）の主効果が有意または有意傾向であり、TT の実施による肯定的変化が確認された。さらに、自分とパートナーへの信頼に対して介入×被虐待経験の、社会的不安に対して介入×群×被虐待経験の交互作用が有意であった。単純主効果の検定の結果、被虐待経験の多い群において、自分とパートナーへの信頼に対して TT は効果を示さないことが分かった。また、被虐待経験の多い被ケア群では、TT が社会的不安を低下させるのに対して、ケア群では逆に高めてしまうことが分かった。TT がパートナーへの信頼感に及ぼす効果を Figure 1 に、社会的不安に及ぼす効果を Figure 2 に示した。

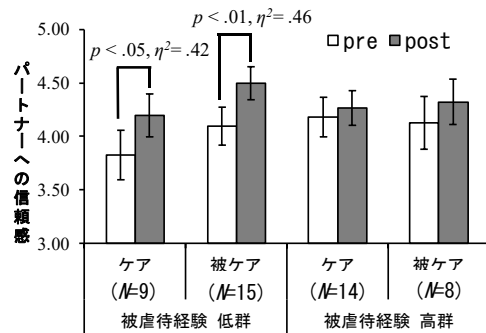


Figure 1 TTがパートナーへの信頼感に及ぼす効果

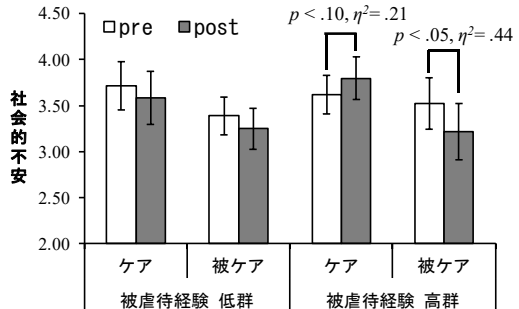


Figure 2 TTが社会的不安に及ぼす効果

注. エラーバーは標準誤差を示す

考察

本研究の結果、被虐待経験に関係なく、TT は全般的に対人関係の改善効果を有することが分かった。しかし、被虐待経験が多い場合、TT は自分やパートナーへの信頼を改善しないだけでなく、ケアする側になった場合には逆に社会的不安を高めてしまうことも明らかになった。被虐待経験者は自身が提供したケアに対する相手の評価に過敏になっていたのかもしれない。この結果から、被虐待経験者が TT においてケアする側になる場合には、もっと気楽に取り組めるようにする工夫が必要である可能性が示唆された。

利益相反開示：発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

(OURA Shin-ichi, MATSUO Kazuya, FUKUI Yoshikazu)